

季高
証解

改正月令博物笥

七月部

一

0-58

俳諧資料カード

済

年代

文化

編者
(筆者)

書名

改正月令博物

備考

七月部一

(下垣内蔵)

詩歌連俳

季寄註解



改正月令博物笫

秋之部

内和

改正月令博物笫 九例

○此書ハ先カ行儀目原先生述

作の歳時の増補して洞齋公羽三十

年前編輯一諸先生の訂正を

乞て春之部夏之部既小世小滌

布ととつるも州稿駁雜かして傳

寫の誤もあり且時務小後を事

火さるうけたたるハ神夏小於る洛

東の新日吉四月の祭祀五月と

改めしハ幡の安居頭今十二月

かの行り其外歳事ノ故事スハ

世俗のいふむとをの内の嘉例

さどつる物小も變まる事多し

今般委く改正一ロ小録と序

此の諸家の校閲を経て板行を
 故に改正の二字と蒙らうむ春夏
 の部も此度正して是又改正の
 二字と附と依て改正月令博物
 筌とくつりのの宛めて正しく誤は
 此各の正しくありとて答あひて
 詩奇俳諧等給に故口記しゆるん
 ○春夏の部の神社祭礼細字小
 各せりかもしあれども秋冬の部小至
 てはさるるを祭礼又いせよふりく聞
 へるる皆大字小書とすの見
 易かりんが為あり
 ○巻毎の初小圓形の内小各と
 うへ見易かりん為ふ設しよまをく

七月部目録

△印ハ俳諧の
 季とりり物々

○養生の法。雨風の考。米の豊凶
 ○妙茶。季とりり祭。其外人家
 重宝のこゝれ処々小教多あり
 少く目録よれとあるさす

秋

○秋の旺とる処。秋由末 発端ノ
 ○秋の異名并ニ註解 一丁

七月

卦 月支 調子 陰陽生 七丁
 並ニ註 七月異名並ニ註 二丁

立秋節

△兼セ 三丁 △處暑中 七丁 候 六丁

日令

此部ハ七月一ヶ月日の定り
 する事楚の定りしることを記す

先天節

七丁 △洗車雨 七丁

硯洗

△机洗 七丁 △山 城北野煤拂 七丁

七日節供

七丁 △索餅 七丁

洒淚雨

七丁 △七夕 異名 七丁
 九丁 詩奇セ 九丁

二星

△星合 △曬衣夕 △巧夕 △乞巧
 △星夕 △星會 △乞巧奠 △犬飼星

男七夕

△女七夕 △七夕七娘 △せりし妻

七箇池

△百ヶ池 △乞巧針 △占蛛絲

△此の赤△星の手向△度の立琴△七夕の借と△水鳥の舟△梶の葉△星契△星

迎△年の渡り△妻む久舟△妻こ一舟△七種舟△天の川。異名和名

△秋さう衣△紅葉のそし

○七夕之文 十九丁 △七夕結 十九丁

△京北野御手水 十九丁 △池坊立花 十九丁

△本願寺菟花 十九丁 △逆峯入 十九丁

△京文珠會 十九丁 △六道茶 十九丁

△模賣△迎鐘 十九丁 △清水千日茶 十九丁

△模買△魂迎△迎火 十九丁 △中元 十九丁

△孟蘭盆 △盆會△盆供 △施餓鬼 十九丁

△聖祭 △聖天祭△聖天棚△天棚 △棚経 其外供物 十九丁

△前尾草 △水鳥の中 △墓茶 十九丁

△生身玉 △荷の儀 △差精 十九丁

△解夏 夏昏納 十九丁 △解夏州 十九丁

△安居頭 十九丁 △三井寺女詣 十九丁

△水灯會 十九丁 △施火 △大文字火 △妙法火 十九丁

△舟形火 十九丁 △送火 十九丁

△餘戸祭 十九丁 △経木流 十九丁

△松崎題目踊 十九丁 △新綿 十九丁

△つと入 十九丁 △鷹島峙出 十九丁

△京御灵御出 十九丁 △宗祇忌 十九丁

△文覚上人忌 十九丁 △諸方地藏祭 十九丁

△愛宕火 十九丁 △秀山別 十九丁

△信州御射山徳家作御神事 十九丁

△月令 此部八月のさきさきまうらうらる七

△撰待 △門茶 十九丁 △燈籠 △高焼籠 △きうと燈籠 十九丁

△踊 △花火 十九丁

△きうと△舟さうら△花さうら△折 △軒のさうら 十九丁

△燈籠△廻りさうら△軒のさうら 十九丁

△踊 十九丁 △花火 十九丁

△秋の扇

△扇をく △團をく

七ノ

△都六尊念佛

七ノ

△相撲節會

七ノ

△ことり使 △さくら角力
△とまよふ △過ぎとまよふ

時令

この部ハ七月一ヶ月時候
カウケルニ瓜あつたを

△初秋

七ノ

△残暑

七ノ

△饑暑

七ノ

△稻妻

七ノ

△秋の初風

七ノ

△秋涼

七ノ

△初嵐

七ノ

△冷

七ノ

△二百十日

七ノ

草木

△萩

△萩の鯛

七ノ

△楓

七ノ

△楸

七ノ

△柞

七ノ

△檀

七ノ

△榎

七ノ

△木槿

七ノ

△朝負

七ノ

△秋海棠

七ノ

△玄及

七ノ

△桔梗

七ノ

△沢桔梗

七ノ

△蘭

七ノ

△建蘭

七ノ

△女郎花

七ノ

△茶の花

七ノ

△仙翁花

七ノ

△観音草

七ノ

△翁草

七ノ

△弟切草

七ノ

△益母草

七ノ

△鳳仙花

七ノ

△旋覆花

七ノ

△野菊

七ノ

△やいと花

七ノ

△曼珠沙花

七ノ

△常山花

七ノ

△頰桐

七ノ

△苧麻子

七ノ

△洗柳

七ノ

△茗荷花

七ノ

△爵金花

七ノ

△薏苡

七ノ

△蒲萄

七ノ

△紫葛

七ノ

△桃子

七ノ

△木瓜実

七ノ

△槐花

野子

△蓮子飛

野子

△刀豆

野子

△夕貞実

野子

△青瓢箪

野子

△西瓜

野子

△何ごと

野子

△束

野子

△粟の穂

野子

△稻葉の雲

△稻の花

野子

△早稻

△室の早稻

野子

生類

七月の生ものと集いとるを(丸)この
ころ下の八月又九月にも用ゆる物

△初鷹

野子

△初鷹

野子

△鳥打

野子

△荒巻

野子

△鳥屋勝

野子

△鳩吹

野子

△秋の蛙

野子

△秋の蠅

野子

△秋の蚊

野子

△秋の螢

野子

△秋の蟬

野子

△蛸螻

野子

△第蝟

野子

△秋のてん

野子

△田畑虫送

野子

△蜻蛉

野子

△赤卒

野子

△虫の音

△虫撰

野子

△虫合

野子

△虫尽

野子

△虫籠

野子

△虫賣

野子

△害虫

野子

△月鈴虫

野子

△松虫

野子

△蟋蟀

野子

△促織

野子

△蚣蝮

野子

△竈馬

野子

△稻虫

野子

△阜冬虫

野子

△樵虫

野子

△藁虫鳴

野子

△馬追虫

野子

△縮つこ

野子

△藻鳴虫

野子

△蚯蚓鳴

野子

△蟪蛄

野子

△常山虫

野子

統圖より日西方の白道をゆく
これと西陸とつくと見えたり
和歌も秋の方角を西とよみ
る例は古今集藤原勝臣
の歌あり

○歌ねをばとらてはのうらふか

西より秋の方角を西とよみ
とよみたり ○精は白虎とい淮南

子も西方の金なりその獸は白虎
とあり ○人の義ありとい淮南子

小秋と非とす矩の万物とたごと
ゆふより義は成まり成り方は

て物の角ありかきらひて人か於て
の義のあり心あり ○天は夏天とい

元帝纂要小天と夏天といふと有
て註は是の愍より万物の彫零と

そよみよきつるこゝ愍むと見
えたり ○卦は兌とい易兌は正秋

也といふふよたり ○氣は小陰とい
目の上 ○臟は肺とい人身の肺を

五臟の花蓋として上より金も属
とる故小秋も配當とるより 医各
小見えたり ○色は白とい礼記は其

帝は少皞とありて註は少皞は白虎の

君も金天氏なりと見えたり ○味は辛

とる礼記は其味は辛し其臭は腥し

と有て註は辛腥といふも金も属
とるとい見えたり

秋異名

白藏。素商。摯斂。金德。短晷。商應。

○五政。木落。陰中。金勁。西灑。金行。土感。菊時。

○葍秋。爽籟。少皞。收成。金商。朗景。明景。

異名註

白藏といふは白の秋の金
色藏は収藏し爾雅に出

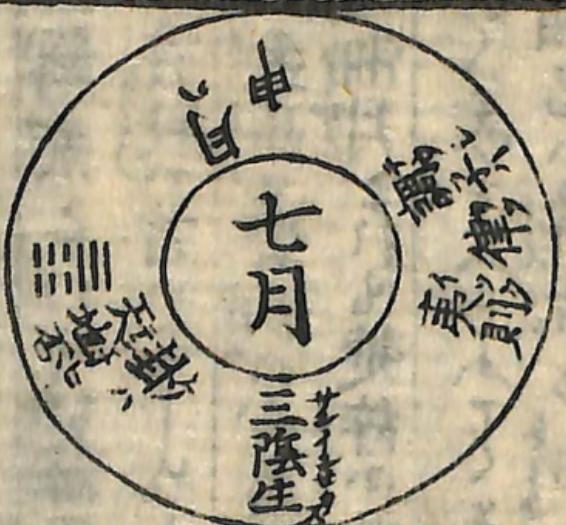
○素商といふは素の商の秋の律
あり ○素秋も此理元帝纂要に出

○摯斂といふは摯の斂の盛
徳在る月令あり ○短晷は

〇五政ハ管子ニ出一曰博塞と禁と二
 曰五兵の双と見事さるん三日旅
 農と擲と聚收と趨やよ四日缺
 ちつと補ハ折るん五塞げ五日塙垣
 を修め門閭と周ふせよ己上五政之
 〇木落ハ木葉落るん楚辭出 〇陰
 中へ前漢各律曆志有 〇金助ハ兵淑
 が秋賦ハ金氣方勁ハあり 〇西瀨
 ハ前漢各郊祀志出 〇金行ハ德
 さるん小行るんあり 〇士感ハ大
 夫秋ハ感どこハ諺ハよりん 〇
 菊時ハ時とさすあり 〇蓐收ハあ
 つまらぬあり 〇爽籟ハいづらな
 る秋ハ声ハ 〇少皞ハ秋ハ帝ハ配す
 己上元帝纂要ハあり 〇收成ハたさ
 りあり 〇金商ハ金ハ秋ハ德商ハ秋
 あり 〇朗景ハ明景ハ秋ハ景色ハ
 〇右の外秋ハ三月ハ渡るん季ノ物
 ハ別ハ三秋ハ部あり

七月之部

△此印の分是ハ七非諧
 の季寄ハ用ハ来ハ物ハ



三陰生とハ秋
 ハ陰の初ハ故
 ハ孟秋ハ於て天
 地初ハ之ハ肅ハ
 ハハ肅ハハハハ
 ハハハハハハハハ

〇律を夷則とハハハ夷ハ傷ハ万物
 始て傷ハ天刑とハハハハハ前漢各出
 〇卦ハ天地否とハハハハハ夏の三陽
 上ハあり秋の三陰下ハあり象

七月 異名

△孟秋 礼記出 △上秋 韻府出
 △季秋 纂要 △首秋 韻府

△新秋 韻府 △早秋 同 △蘭秋 事物異
 △開秋 同 △蘭景 同 △相月 △孟

商 同 △夷則月 △湘月 留青采珍
 △蘭月 同 △相秋 同 △秋初 同 △商

節 韻府 △爽節 同 流火 同 △初
 秋 纂要 △盆秋 △涼月 同 各ニ出

和名 七月 異名抄 △八月 同 ちてあひ
名 月 秘藏抄 ちてよ月 莫傳抄

△おとろひ月 藏玉 七夕月 同
ふとあきき月 同 ちて月 莫傳

異名註 △孟秋の孟の下のめと云
字なるゆへに△上秋の三秋

の中とて七月の上のたつ月より

△擊秋の擊の下のめとてよ義あり

△蘭秋 楚辭出 秋蘭と紐て佩と

とてありのちてよとてよとてよ

△開秋の開の下のめとて云義とて

と下免て秋ふあり月との心入

△蘭景これに楚辭の秋景の故

△首秋の首の下のめとてよ義あり

△孟商孟の初の心商の秋の義入

△湘月これに楚辭の此月湘君と

てよとてよとてよとてよとてよ

湘君の舜帝の后かこ

△夷則月夷則の律の名入 和註あり

△盆秋此月孟蘭盆會とてよとてよ

△涼月ハ礼記月令ハ孟秋の月涼
風至るといふとてよとてよとてよ

和註 七月の七夕の借とて色
々の文とてよとてよとてよ

ひきき月との心を畧して文月とてよ
月ともいふとてよ 異名抄 出

○ふ月といふとてよとてよとてよ

○ちてあひ月とてよ 牽牛織女とてよ

ひふ愛あひ月とてよとてよとてよ

○ちてよ月とてよ七夕のちてよ

△とてよとてよとてよとてよとてよ

○ちてよとてよとてよとてよとてよ

○ちてよとてよとてよとてよとてよ

秘藏 ちてあひ月

七夕のちてよとてよとてよとてよ

ちてよとてよとてよとてよとてよ

藏玉 七夕月

家隆

秘のちてよとてよとてよとてよ

七夕月のころまらるる
ふらふらき月

七夕のまらなけをのりあて
つとあつたふらふらき月

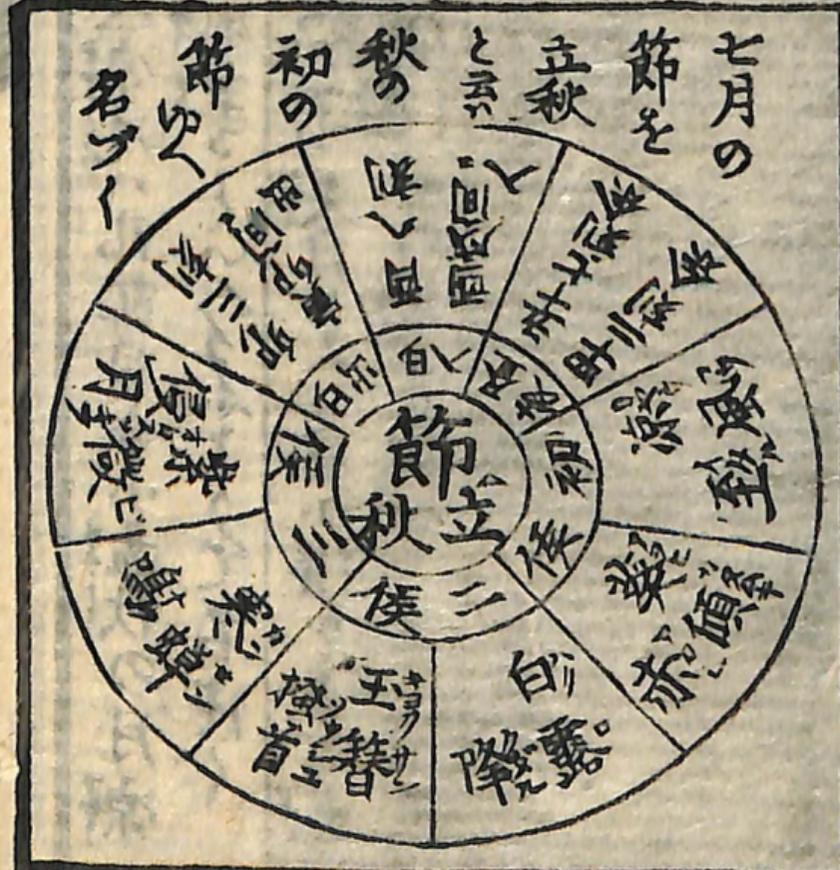
奠傳 秋初月

同くつらとつとむねうけり
秋の初月とわらふらき月

藏玉 ともく一月

七夕のあつたふらふらき月
名とそつとともく一月

立秋 節の名の七十二候の草木七十一候。
至極長短の日の出入等左の記と



○涼風至る此天地の仁氣散ると殺伐の氣ふるまひの禁むかむとて赤く秋のりふらふらき月

○白露降まると秋の陰氣夏の陽氣が来ると氣候まどろむとて礼記の註の見えり

○玉簪花と催とともく首と楡と云の聲は愛とるといふらき月

○寒蟬鳴ると暑中小生とて蟬の聲は愛とるといふらき月

○紫微月と侵とともく紫微星とつらとつと位乃月ふらふらき月とて礼記の註の見えり

立秋 七月の節と然るともく

○初秋の秋立て三五日れとるとよむとて初秋の趣の心

とよむとて初秋の趣の心

とよむとて初秋の趣の心

とよむとて初秋の趣の心

夫木 五秋 定家

くまのたのたのころきけり山あふり
清くひびく風のききふ

夫木

後進我院

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

蓮山

立秋朝

御製

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

千首

立秋風

為尹

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

同

立秋曉

師健

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

千載

社頭立秋

重政

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

洞

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

△秋の来る△まきの葉。秋の来る
△まきとて。今初より秋の来る

連

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

俳

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

詩

立秋五字對句

同上

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

好雨

天邊落

金井落梧桐

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

新秋

水掬清

涼生一枕風

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

秋暑

困人仍

扇扇爽氣浮

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

晚風

生竹却

添衣入清商

あふりて又あふりてふく風よ
あふりて又あふりてふく風よ

迎秋日色

蒼蒼前見

望白雲

入夜鐘声竹外聞 夜來秋

詩 立秋詞

明 龔 最

烟雲黯淡仲宣樓 在萸年花

逝水流 色モ雲ノ色モウツサ

客ト比ニサカモリレタソノタカトヲ仲

宣ガ楼トイフ故事ナリ○在萸トヤ

ツリユク月日ハテタドユクニツナガレ

ヤマ丸 白雲郷山千里外 滿

城風雨又新秋 二テ故郷ヲ千里

モヘタテ、女ビノソラニラツイテ井ルニ此

外ノ城外一面ニモノスゴイアマカセガオ

コルトオモヘハゴトモ又

ハツアキニナツタノジヤ

立秋 唐ニ女童椒ノ葉

ノカタチヲナレ今日カガレニイタク地

日本ニテ柳ヲカケ 菖蒲ヲ 髪ニニ

クニヒトシ 豊華録ニ出タリ

○日本ニモコノ事 徃昔アリトゾ

立秋 一葉 一葉知秋 各言故事ニ出

故事 一葉トハ桐ノことナリ

△桐の葉△一葉散△桐の葉落る

右ノことモ 托カトトナリ

○淮南子ニ曰 梧桐一葉落天下

知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

○程明道ノ詩ニモ

詩 井梧一葉報秋聲トモ作レリ

○遁甲尺目ニ曰 梧桐立秋ノ日一

葉先ツ落トモイヘリ

分 夫木 國夏

ウツクク 和秋風小やまゝかの

園辺にけりけり 秋の一角 細巴

非 お白つゝ 隅へは 才相一葉 移竹

狂 清い 風をよめて 作る 月ハ

風の一葉のらりし 真徳

立秋 一葉舟 小補韻會ニ黃帝

故事 浮葉ヲ見テ舟ヲ

ツクルト云故事トロニシルス淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリトイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

○**芳** 廣沢の長草々々々の香よ
又の川を流るるやしの秋風よ
らるる一葉のつるむくみ

非 秋の氣と造二葉や成秋亦直正

立秋 **柳散** 此ゴロチリソムル故ス
柳桐ノ類ハ早クチ

リ初ルナリノ事文類聚ニ晋ノ顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望

秋先零ト云フ語ヲイダセリ
コノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋 **一葉衣** 是ハ一葉ノ故
故夏 事ニ重ノ衣ヲ

取アハヒタルモノナリ
○右一葉の事よりつるまも立秋

一日ふかぢるるもあはれ初
秋の事によとも然るべし

立秋 **天氣** 立秋よりほぐさて東
北乃風をむゆま

稲ノ実入ら守の又蒸あけられハ
秋收ト云一ツバノ夜ひマ

夕ハ大風なりとれを夜北と
つかり昼あけく残暑つと

夜をれてもこー夜北吹あハ
ほいで日和よく出けまぐ稲

小大さいよーの南風にくやめた
あけさの雨ふるの秋季ハくも

あやし、多く出ても風出さ
まハあまふるバの朝ごん

ひがれ方赫々とわくやけ
まバ陽氣のさくんさるる南

へ赤もなされはほいで日和は
○朝天雲のやけふハ二三日の

らち小雨ふるの夕やけ北へま
ハハもよりよー南へまの雨

ちりちりやく遊るも又雨かり
○朝の虹ハ西よ見ハ三日の内り

雨ふるさう暮のあつひがはら
て晴ふるる〇胡夕ともにあづの
真直ふさくかくまど棒虹と俗
ふりかまふに大風ふるりのし

立 雲氣 白雲東南の方より出
て空小はき出さば大

風ふるこの風と伊勢東風と云
〇西の方より東のかく行く

西南西北より日ひ和なり〇黒
雲天の川とさざげの風雨あふ

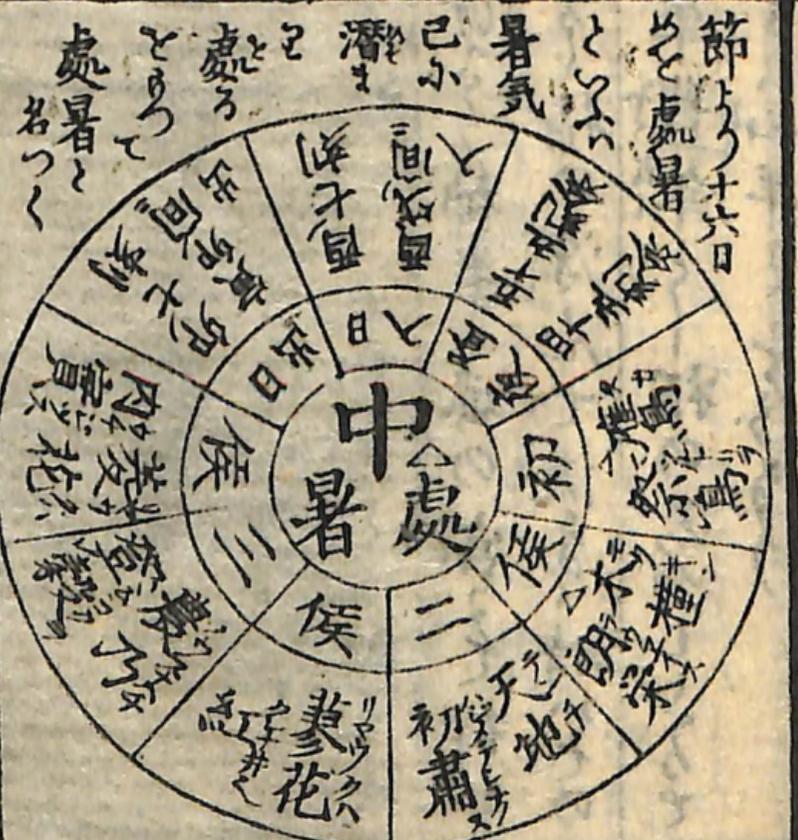
千首 初秋雲 鳥尹
今うまご対あるさざげのされも

あれのさきひのさきせを
非 是意と編より秋のとき吟

立 妙薬 赤小豆十七粒或十四粒
を井花水にて吞ひ秋中赤白痢

病とさるふ事々
處暑 中夜長短〇日の出入を記す

〇草木七十二候



鷹鳥と祭る殺伐の秋氣を得
て鳥と捕り沢の四面ふる異

祭とるすふ似く是と鳥と祭
し小瀬の魚と祭ふなる

木槿朗栄とくむくげの花咲
る催しにて葉をむくむげり

天地始肅天地の氣秋
ふりてとる多てあまるといふ

蓼花紅いたでの花さくし也
農乃登穀とい此月農人五穀

初穂と天子新と嘗むと礼記
ふりて天子新と嘗むと礼記

見えてくる。本朝新嘗會も是ふより
○菱花内実と云ふは実でゆるり

日令

此部は七月一ヶ月日の定り
たること支の定りたることを記す

朔 今日風雨あれぬ米の價貴し
日 ○南風あれぬ米粟大かより

先天節 今日聖祖降誕の日
依て名づく事物異名集出

朔 江 ○本所羅漢寺五百羅漢
戸 供養施餓鬼あり

朔 信 ○下諏訪明神秋の宮祭り
濃 委くへ年中行司綱目か出す

三 京 ○鳥羽院御證月御忌今日
都 竹田村安樂壽院かて行り

四 伊 ○栢流一の神事。栢占も云
勢 昔ハ土貢島より栢と捧

げりり神事ハ風の宮より行い
る栢の浮んで流るる時ハその
年豊年と栢のあづもころと
まハ凶年と云はるる

○あふこころみ方のかかへ
まうとまのいひろとまを寂阿

五 京 ○建仁寺開山忌。講ハ榮
都 西千光國師葉上坊僧正と云

六 ○高臺寺施餓鬼什物出。四条
二条河原七夕手向の笹流し

六 洗車雨 六月ハ降る雨とつら
七夕の車を洗ふと云

事 又日本歳時記ハ委くあつ
又日本歳時記ハ委くあつ

六 硯洗 机洗。京師の見女令
日 硯机と洗ひ清め

の葉の露とつら裾の葉と七夕
の手向の詩哥と尺目供とる

六 山北野煤拂 北野天神の社今
日 城内陣ハ納めあり

神室と外へ出して虫干と其間
内陣の陣の煤とつらひとる

○諸各北野御手水六日とる
煤とつらひ七日とるハ誤り

七〇西南の風と金風とつふ米
日実少し〇雨ふれば八月小洪
水あり但し小麥・麻・豆のふ
價やとととせ

七日節供 今日内膳司より
當日の節の供御

を載どととて供御の毎日奉
る物うれとも一年の内節々
奉ると節供といふる

〇七の少陽不變の数あり故
當七日の本朝五節句の一と
て祝ふこと日本紀江次第公事

根源等其外諸各小出て歴
然する式日あり俗二星の祭り
かこもりて公事の式日と
を忘れしとふ似たり

索餅 昔高辛氏の小子今日
死す天鬼とさり人を

さやまき常に麥餅を好むこ
ふよりてこの麥餅と供じて瘡疾
とまふるもより十節紀小出たり
今日の節句の瘡と除く為也と
つり此ゆいもや今日親族索麵
とたり又索麵と食ふより

索餅と云索麵のこさり麦
索ともつり凡俗考出たり

生花式 撫子・桔梗・槿・萩
葛・尾花。とさる

七 洒淚雨 七夕の雨といふ牽
牛と織女と別とを

悲しとさみごととをその雨
るより唐土にてぬくとい
る〜たりたり黍〜ハ串文類
聚天中記等小出たり

七 七夕 二星 星合 曝衣夕
日 巧夕 乞願夕 星夕

△聖會 △乞巧奠
△男七夕異名 牽牛 星經 河鼓 亦雅牛

郎子平大金 牛星 晋公卷録
同和名 △彦星 和名抄 △大飼星 月

牛ひく月一歌林抄△男七夕

△七夕異名 織女 星 天孫 抄文

星娥 詩学大成 天娥 宋詩選

天媛 同上 △女七知

同和名 たまろづり 喜集 △とりつま

○七夕七姫といふハ

△朝良姫 △栴の葉姫 △百子姫

△薰物姫 △うぐいす姫 △秋露姫

△糸織姫 已上を七夕乃七姫と

いふあり ○草に出る

○又七夕七姫の一説ハ ○桂姫 ○栴

の葉姫 ○秋天姫 ○琴寄姫 ○灯姫

○糸織姫 ○篠吟姫 已上神皇集の説

○證哥ハ名数和哥選といふる昏

不出る少人畧之右名数和哥選ハ

と多く畧之右名数和哥選ハ

絵ふありといふる故初学の人を

見て大方便らふる昏なり

○七夕祭と乞巧奠といふる巧ハ

たらしとよして女の手とこの器用

かゝるやうに乞ひの事あり奠

ハまろづりといふ字あり日本にてハ

天平勝宝七年ハ禁裏にて初

て行り先御殿の前ハ白木の几

と立てて立琴として十三絃の箏と

呂々律の調子ハ合して柱とを

瓜菓の類とあり竿のちハ五

色の糸とけつねたらハ水と

たへて二星の影とあり香花

ともをへ祭らるるやう江家

次第にも委しく記されり

○唐土ハ此夕ハ婦人ありて

五綵の糸を以て星の影ハ

て七夕の針の影とあり庭

瓜とてのちとありて巧と乞祈

ハ蜘蛛がけとありへるるもの

上はさるることあり杯ハのち

ハ今世今日見女子竹の枝ハ短尺と

洗たる和哥と手向るまのいほて和
國の風之竹の葉小糸とうけて祈る意

とり妻

逢ふことのまじりさしく
名づくるを又万葉

やらのせの神の成たり 芝儼
人あうれり若んそ多入ハ丸

又灯火姫ともいふまう 證哥名
教和哥選不出る

○故事詩歌次小かづく 出する
又天の川ハ川よこはるく小星の

あつまうとるまけ七夕の由來
其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又ハ銀河抄
等不出すたりとてしる

七箇池

△百箇池とも七ツの
鹽水とて星の

影そらいとみ

新古今

長家

子なるくとむつゝ宿の比みふ
や一合の粒もやうれやん

夫木

右京大夫

望らるか二つれりの物くらり
たしみのあふりつりま

非 星合の鹽小あや妹背山 因元

乞巧針

婦人七孔の針小色々
の糸をどとて七

夕またむらさき

千五百番哥合

あひもせもねの糸の繋うとや
結ひとさめる糸をわくの糸

占蛛絲

婦人瓜茄子等と供へ
祭つて次日早瓜の上

又蜘蛛葉といふたれど
と得るうりし手

願の絲

五色の糸と竹の鞆ふ
かちて手向るなり

詩 願絲七字對句

詩礎

虚無天上支機石

穿針時

昔張鸞ト云人がイカタニツテ天ノ
川ハイテトヨク女ノ多ク有リ石ヲモラテ

ハリノミ、ズニ
トウトマトキ

信有人間乞巧絲

願絲針

人間世界テヨロ子カビノイトニガリイ
ヲシテ婦人がオモロクニキヨウニナリ
イト思フイハニコト今モソノイヤ

子カイノイカ
ヌチカニモ元

星は手向

燈火其外何とせし
今日星は供する物と云

⑤ 夫木

常盤井入道

向家のむねをこもる向して

庭にかけたる秋のまゆひ

庭の立琴

⑤ 夫木 七夕のあふ
夜は庭ふをく琴の

あふりにむくいとあふのいと 寂蓮

⑥ 立琴やあにまゆひ系は琴葉と

七夕ふ借

⑤ 惣して七夕供する物
をが守といふ中にも

いろとふ衣とカサヨクして是

とも手向一かなり

⑦ 後撰 せもあふをせはる押して

七夕つめふくともりの かな 慈圓

水掛草

貞徳の説よみ水影
草は多くい七夕

よらりの水掛草も 稻のこもて

稲い水は影のうらりりの故水影

草と野く尚又盆の處かも記と

⑧ 延文百首

賢俊

七夕乃結ふ繋りハあ方の川

あふをよまの流もろりし

梶の葉

七夕ふハ七枚の梶乃
葉ふ手向の歌とか

と五色の糸にてまたて屋の上

かわびをくものさるは 中院通

茂公の御謔るり 淡雲同巻ニ出

⑨ 夫木

入道前大政大臣

かさほたる梶の七葉よとふこと

むあまうらるる秋のゆふくれ

新古今

七夕のともる 秋の梶乃葉よ

いく秋うたつあのかつと 俊成

⑩ 連

梶とらりまはあたるあは葉葉

⑪ 非

梶の葉よあはるる葉まら移水

⑫ 狂

梶の葉を移して葉の揮きと

そのいりやみ浦やうらるる 曹石

○一説に桐をてのりく楸をて紙を造る木の葉ふ哥とかくたなり

星契 牽牛と織女と 牽牛と織女と 年々今宵の逢瀬と契約を心く

△草庵 けり中も吹きまはる枝瓦と かりとしたのむ星合のそく頭阿

星迎 織女牽牛と 織女牽牛とまらむ くる夜と心さる

△羊 年の渡 一年の一度天の川と渡りて牛女の

逢ふまのゆへはや〜乃こころしく哥にもよあり

△系 續拾 系ぶさういそつたての川多瀬いらくた海うされも 隆康

妻迎舟 織女が牽牛と 織女が牽牛とひまふ出さ舟と心さる

△系 白川百首 頭朝 夫星のつるむ久年いふして

排 一系やさかな娘と 逢へ舟是等 せはふまふせかろそくそあらん

△妻 妻に舩 牽牛乃集つて来る舟といふころん

△俳 日も多めとる舟のま女七夕如春 ○星の契より此知すとい哥の詞へ

△七種 七種の舟 草花をて舟とかぞ 七七夕と祭るまら

○秋 秋あさく名尾花葛女郎花ふらぶらぬ撫子これと秋の七種と云

△秋 秋さる衣 彦星の着てはる衣さるもさるもさる

△お 万葉 七夕のいほとて立ておろ布の ねまふこさるもさるもさる

夫木七夕のいほとてさるもさる衣の 秋さる衣けりそえん赤人

△天 天河 異名 銀漢 韻府天漢同 星河 詩学大成明河 古支

天潢 梁何遜詩 銀潢 雞跖集 雲漢 唐詩紀

△和名 河まの川 古今あまのの川さる日 やと川 星玉星のやとくろ 四季物語

新勅

後二条院

心あつ川流るる天乃川

うかてま川男の秋の夕暮

連波さあせりやうせ夫の川宗祇

俳七ッ子小回ひ流るれつ天の河珪林

むう時ふくくして細くての河珪洲

系中ひとるきて娘一娘の起波

浮世の夕流とやまれば河半雲

狂きくつらう浪りつと天の河

玉のさるるはし合の元 紫若

詩 銀河詞

杜甫

常時任頭晦秋至最分明

云モノハツ子二見エタリ見エナシタリシテ

モ氣ノツカヌモノビヤカアキニナルトキツウ

アキラカ 縦被微雲掩終能永

ニ見エル 夜清 カノアミノカハガムラ雲ニオホハ

ト見 含星動雙闕伴月落

邊城 フクニテハキシリノオニナガマヒ

ナリ月カゲニツレテハ辺鄙 牛女年々

ノ池ニモ見エワタルトゾ

渡何曾風浪生 年コノ天介ヲワタシ居下界
川ノチガフユニ風ヤナシノオコルコトハアハマイ

紅葉の橋 次ニ註あり 頓阿

今更にも雨ふるさうしてこれ河
なれる針くるるさうやうん

烏鵲の橋 かさねのようハ乃
橋の織女ハ天帝

の女牽牛と夫とて後機を
かろく瓜ねこころゆへ天帝怒

つて其中とさけ河をるるを
住しむ七タふ一度會事とゆうす

鳥鵲この橋となりて織女を
越しむらこつらうさうん

とほつたこの橋ふつらうて紅
涙と落すこれふらうて紅葉の

橋ともしふこれさ俗諺とて
信用とらふたすもさ不博物

荃小弁とのかきださか
とれ種類たり

〔夫木〕

俊成

七夕のきえぬ契うと流んこや
こゝろはさしふるかさねのし

〔非〕雨後かゝれたるをせしの橋も其角

七夕の歌詩連俳かづく
いづす

〔六百番奇合〕

家隆

あふれた庭のまじひつゝえぬ
よや更ぬらん星合のそと

夫木

為家

君をよめる世もかほじあはせの
かこゆる川を星合のそと

永久百首

七夕後朝

兼昌

朔風川波さりけ一夜つち
きをぬゆるたふも立と白く

家集

海路七夕

経信

星合の彩なうらまゐかこの海も
天の川流のこらちととれ

新續古待七夕

洞院攝政前左大臣

天の原そとる河のよじり

あはれあをと御舟とせぬん
續古七夕別

續古

七夕別

家隆

この川あつ川をよその海も
よそたつ川流あつ川を

續千

閏月七夕

前中納言定房

あつあつねはあつその致そり
こよひりそや天の川も

白川七百首

二星適逢

俊成

七夕の舟流いさし遠くし
かきし一とふ一とふり

奇合

閑思七夕

貞継

八重を津よぐり新流とくねかて
り合のそを極ちつるふ

白川

七夕契久

御製

七夕の天の舟夜いとたつて
はさあやふのたけし

詞

あよの年ふ一夜の契り。まれ
あつ中。年のそり。秋の一夜

あつ中。年のそり。秋の一夜
あつ中。年のそり。秋の一夜

七夕の花はさし。夏のあ。庭を

① 七夕かきみいふと結念の芭蕉

精や丸太の上りの川 晋子

及りぬかたて涙なり 望来 十六

浮きものうきさかひや女七夕 才啓

文りや花世もあふ天の川 露橋

初より糸りて星の別うか 二柳

先々命へ星や世せぬあかし 立圃

星合のかきぬきや飯と汁 移竹

去似し秋花の七葉やまのり子 貞佐

② 公卿すくしてを果あふ七夕又

むらけの川に流るるは雄長老

七夕ふさるるしに衣あふるれと

かゝますねふあゝくぬきしよ 由縁毎

詩 七夕五字對句

同上

卷幔天河入 故郷臨挂水

開窓月露微 今夜眺星河

③ 七夕七字對句

詩 七夕七字對句

月渡天河光轉湿 懷良霄

鵲驚秋樹葉頻飛 銀漢回

當簷半落天河水 織女星

遠徑全低月樹枝 笑牽牛

銀燭秋光冷畫屏 輕羅小扇

撲流螢 秋ノ光カ画ノカキタハウ

④ 王建 七夕詞

牽牛織女星 夕ノカケハレノヨルノ

王階夜色冷如水晶看

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコニ子

⑤ 全 馮琦

詩 全 馮琦

天空露落夜如何漫道雙

星已渡河 鸞がハレヤカニツユモオリ
テヨハナンドキデアラウト

思フニ大カタ今コロハニツノホシガステニ
アノ河ヲワタリ玉シント人カイフ

見説人間方恤緯可知天上

不停梭 ケンガイ人ケンカタムケノ糸
ヲ星ニサ、ゲルケト天上ニ

ハオリヒメガ梭ヲヤスメズニ
ハタラオラセモイ思ハレル

詩 仝 唐 祖咏

閨女求天女更闌意味闌

△スメタチガオリヒメニ子ガヒラカケテセタ
ミツリラスレバ夜ガフケテモコロニハニダサ

ヤウニモ 玉庭開粉席羅袖捧
オモハヌ

銀盤 タニラシイタヤウニハニテセ
ニタミツリノ儀式ヲカザリウスキ

ヌノンデニシロカ子ノタラヒラ 向月穿
モツテ出テホシノカゲラウツス

針易臨風整線難 ハリノミ、
ズラ月カ

ゲニトラスフハナリヤスク風フキニテ糸ヲ
レラベルハ吹チラセテセキナリ穿針整

線トモニセタ 不知誰得巧今且
祭リノ故事ノ

試尋看 コトモ尋見ノニツリヲレテタ
レガヌイハリノ手キハガアガツ

タゾニツコ、ロモ
トナチニタイモヒヤ

○七夕手向之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭

上願絲多 ヨク、思フテミレバワカ
イ女トモガニイ年ノホシ

ニ子ガヒラカケテテキ、エナラフトオモフホ
ニサホノサキニカケタ子ガヒノイトガトカク

オホイ
フシヤ

○二星適逢未叙別緒依々之

恨五夜將明頻驚涼風颯

颯之聲 ニツノホレカタニサカニアフテ
ニタ別レギハノクトクニタウ

ラミヲモ云ツクヤヌニ夜ガハヤウアケカ、ル
カレテレキリニス、カセガファイテクルコエ

ニオドロキ
タ、ハン

○露應別波珠空落雲是

殘粧髻未成 セタノヨノアカツキノウユホ
レノ別レノチニタテアツカ

玉ガホシク落ルヤウニエルヨアケク雲ハオチ姫ノ子
ニタレカミノミダクアラニタツ名ハタラチキマ

七 妙藥妙術

日と十五日と

此兩日房事と戒免はしむべし
百髮除く法 今日百合の根を

煮て煮熱し搗て新しき瓦
器に盛て屋の内は掛陰乾か

して百日置て白髮の人さるる
下地の白髮と悉くぬきさる

て是を塗まとい黒髮と生じて
白髮さるる身面の疣目と去る法

今日大豆して疣目の上と云
度ぬぐひ其大豆その人の家の

南向の屋に東より第二番
目の溜とらむ中へ種をくじ

そのとら一所ふ疣も去るべし
記懐の術 今日蜘蛛一ツとらて

領乃中小はくまばらものせかえ
つとく能らるる事はし

○近年彫刻ふるる物覚早傳と
らるる各あり甚しき本なり

状 七夕之文

晚来 雙星之佳會 世間

巧奠 青瓜之奉 女兒之

事 不宜乎 併待 狂駕

尺牘 昏昏 年註

晚来 今夕 今宵 此夜 往

辰 双星 牛女 兩星 佳會

佳期 良夜 嘉遇 年會 世

間 万国 世上 古今 巧奠

穿針 綵綵 願絲 琴瑟

青瓜 菜奠 綠菓 女兒 婦

女 少女 妾婦 兒女子 宜

平可賞○愛憐

併待云云

中 請来 葵戸 仰俟 顧歩

上 来遊 刮日 期

七日 毬

△七夕毬の飛鳥井家 難波家鞠の會例

式より今日の鞠ハ七夕祭の 為小貞行より入出より見らる

七京 北野御手水

北野天満 宮梅松院

の至今曉御本社内陣小入 して御手水を献し又神室

乃内の松風乃硯吐うへ小提 の葉をとくと備へたてまつる

これハ七夕の神詠と天神まつ 各と玉を為るとそ

池坊立花

京六角堂方丈池 坊門人集り二星

へ手向して立花と興行と立花ハ 當任職専慶法師より初

○東西本願寺小立花あり又 教品の州花と作り物あり是と

△本願寺の籠花とつふりり

○天竜寺虫干 ○加茂松下虫 干 ○東山一心院虫干 ○大

徳寺虫干

大 ○住吉虫干 神室共なく出 坂 ○平野大念佛虫干

江 ○九品佛桑もなるがどらじ 戸 ○本所回向院大施餓鬼あり

大 ○石上布留社笈渡の護戸笈 和を三僧の肩小かけで行いあり

逆峯入

大峯と称するハ即金 峯山也宗派ハ本山

當山の別あり 本山の峯入ハ則 今日まで聖護院の宮より 逆

の峯入又逆峯とも云大峯より 熊野ハかけぬる久又本山當山

の御門主へ御一代一度踏ふけのふ
ハ秋山より毎年毎年の登山ハ皆御代
参り醍醐の聖宝僧正より始
るるり委あづかり三月順の峯入の如ごとく

八京文珠會 仁明天皇の御宇
日都 始りて東寺

西寺にて行なりり公事根源ふ出

俳文珠をやゑはしと見いは 貴

江〇同向院佛餉施入の且主現
戸當兩益乃法事執行

九京六道参 〇植賣 〇植買
日都 〇迎鐘 〇建仁寺

の南小あり六道の珍皇寺といふ
寺へ参り云云今日明日諸

人此所小まゝてて聖きとむり
といふて此寺の鐘とてく是を

迎鐘といふり又植の枝とてく
くり持佛堂ふおく俗小聖き

植の葉ふのりて来きてふとい
り珍皇寺本尊の茶師佛を

小野の篁の像と小堂を安置と
篁此處より眞土へ通ひ道
ありとて六道といふ

俳道を参りて来きてふを春を

十諸 〇清水千日参
日方 〇觀世音菩薩を

今日参詣といふ千日ふわくて
或ハ四万六千日ふわくて諸

方へ参詣とてく京清水江戸淺
草大坂天王寺との外諸方觀

世音を昨今参詣をいふて河州
野崎觀音和州赤良二月堂

三十日 今日枸杞の煎湯を浴とれ
無病不老と雲を七を蒙り出す

三十日 魂迎 〇迎火の今を方を亡し入
麻母をとりて火を焼く走と迎す

火を云へ佛家を説き多し

〇世間を松と門火焚き 檝の枝
とて清水をとりて事をありとふ

火の陽光と以て天の陽の魂と降
水の陰精とて地の陰氣魄を
呼びのぞして亡者の魂魄をむ
ふるまらば一盃漢土の鬼神を
まつる式をまらむびつるのな
らん

○唐土も亡人の魂をむらふと
て官服を着し門を出て空と
のぞき神を導き祭つてつて
又神を送つて出る事ありこれ
ら孝子の誠と云ふと似たり
とも見どもなたとじまに述
士郡子とる人佛者ふまじい
てかやうれうと云ふ事あり
と云ふ五雜俎小見たり

○狂 又て浄びとてをよむしき家の
ひまふあてなるもの云ふ常樂巷

十 京 ○東西本願寺 灯籠
三 都 拜見十五日まで

十五日 中元 正月と上元と十月を
下元といふ今日と佳

節とすうと少くいとれる
さよあうざれども公式の用い
られどもうりく日本歳時記
小見えたり

盃 孟蘭盆 △盆會 △盆供 △盆
施餓鬼の盃蘭盆

會の遺風と常にも寺小て行
ふ事あるも此月の内の諸寺
小て専たこゝの季とくする
かるべし ○勸善彙纂の蘭

盆法事とありせり又施餓鬼
のこゝに禪家とての施
食とくり

○釋迦の弟子目蓮尊者の母地
獄に墮餓鬼道の中にありて
食とる事を得ずとて此日百

味の五菓を供へ十方の諸佛の
供養せしめ人の母則ち食を

得たりと經説の意ありこの説よりして孟蘭盆會と云ふ事始まりといへり孟蘭盆の梵語ありて中華の語に翻訳されば倒懸救鬼といふ事入倒懸の苦をさめふかき事訓地獄の苦ををいふそれを救ふ事ん祭り乃そいへと云ふを救鬼といふ事あり又救鬼といふ器をかきて救ふ器なりと云ふ公事根源ニ出

○唐土にては今日孟蘭盆會と諸寺院とて營む事支類聚ニ出

○本朝にては齊明天皇三年小孟蘭盆會と設くと云り日本紀ニ出

其外委しくは眞俗佛事篇といへる尺目不出り又るべし

○儒家の説は今日中元なみは以て先祖と祭り秋の盛事と告奉る事あり此こと

委しくは歳時記論と祭果之

靈祭

△聖昊祭△聖昊棚△昊棚。十四日より人家

新小棚とまよひけ先祖の灵と祭るく。報恩經は云く凡人年小

六度来る中か今日孟蘭盆小あつればつちを祭りあり

十四日卯の刻小さくり十六日午の刻よかへるト云

△枝大豆△枝大角豆○芋の葉△青瓜○蕎麥△青そば○早

米△青かき○茄子△あさかしの箸△蓮の葉△かけ索麩△あり

の実。桃。菟。右の類祭供する△此印の多し季よかりあり△ありーさらかきつりの心と

よま台らひの季ふるるべし

○年中行事哥合 前大納言 常々やんくのほきもとるやん たまはるてはぬ月さうけみ

○非冷おも水真し 昊祭り嵐雪

冥祭なるも焼畑のくさうは芭蕉
柩經や声のさびい身子坊主 其角

狂こころのちんくわの転るるは冥柩へ
さうかけ家のいんちんあまうー 陀人

柩經 今日其家の且那寺の
僧來りて冥まつり此前か

て經とよむ是と柩經といふ
非柩經やこれ曉ふ阿闍の水 其角

鼠尾草 鼠尾草 異名△水掛州。穂
長くして水とそぐ

小便あいの名づく全躰熱と治
一湯と止ると本草にも見え

て渴と止るゆへ餓鬼水と手向
ふ用ゆりとぞ○七夕の丸ふも

水うけ草とつらありて稻のこえ
ととれども今日のこころの州

はこぞとらたの事ありし藻塩
呷ふも出又千梅子の説も同

○藏玉 子れいんくふやねんを
水むすまのほめのもふく

墓参 京都へ七月朔日頃より
十日頃まで墓参あり

とらえ○大坂ふい今夜亥の刻
頃より明朝へうけて十日とびと

小橋等其外七処の墓處無縁
の者参詣とらあり是と七墓

廻つと云○唐土でも今日先祖
の墓と掃除して供養とらえ

玉筥 非おいてを拂て
まうまや玉筥 康吉

生身玉 △荷飯。糯米で荷
葉小包と吉祥蘭と

りめて上を括り贈答て生
身魂と祝ふといふ

○今凶人と祭るは冥祭といふ
生る父母と饗應とら生身魂

といふ此月公家武家とも世
不在でる尊親を饗食應るさう

事 紀事不出り

非 けいばるまといひく墓の飯 康吉

差鯖

鯖のせみ開きて塩ふつは二尾と合して一刺と云是

と蓮の飯と親族たがひふたく
つと今日の祝儀とす

能せむて鯖の骨多うのそせ生身方山
判結やうくられてしも夫婦つと其角

鮮夏

夏げの終しまりとす。僧

徒四月十五日より夏げふころ内い
佛經の類杯昏写と故夏げ各納おさめと

又夏げ鮮せんと云也尚四月十五日の所
又夏げの十九丁メ等見合とす

鮮夏草

夏げふころ僧夏げ筆ひし終しまりとす。以て節と

東あづまねて且家へ送ると云おき。一説
小吉祥中のこしやうぢゆうとす

○秋氏要覽あきうしやうあん曰唐浙右の僧しやう絲しと以て
節ふしと束むすて且越えふ送おくる是こゝ夏げ鮮せん中ちゆうと云

今此いまこゝ中ちゆうと詳つひふとる小己こゝふ五部の法
身みの座ざとす名なつあて吉祥中しやうぢゆうと云

京きやう○智恩院山門ちおんゐんさんもん施餓鬼せがくゐあり
都と○新善光寺阿弥陀開帳しんぜんくわうじあみだあひらき

泉涌寺いづみうりやうじの内うちあり
○岩屋不動いわやふだう千日叅せんじつさん今明日

五十日 **安居頭**

昔八幡むかひあり今
ハ十二月十五日討うちあり

江え○弘福寺施餓鬼こうふくじせがくゐ。法事ほふしの
戸と後相撲ごそうぼくあり○白金瑞聖寺しろかねずいせいじ

本所ほんじよ羅漢寺らかんじ施餓鬼せがくゐ
○麻布あふ善福寺ぜんふくじ藏王権現ざうおうごんげんあり

大おほ○天王寺講堂てんわうじかうだう夏げの結願けつげんと
坂さか○住吉孟蘭盆會ぢゆうきぼんらんぼんかい角力かくりきあり

五十日 **三井寺女詣** 常つねハ女人にょにん禁ぎん
制せいの山やまあり

今日一日ハ女のにょ泰たい事じとゆいす三井
寺じのし詠えいハ委いく博はく物ぶつ茶ちやみ出でと

江え七月十五日より同十八日を法會ほふかい有あ
道みち○淳御堂法會じゆんごだうほふかい志賀郡堅田しやがぐんけんた

十じゆ國俗こくぞく今日親戚しんせきを會あへて遊あそ樂らく
六むと事こと正月十六日しんげつじふろくにちあり

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付あえ来年不作の兆と

と○今夕月上るる早久の暗るく月上る事遅るれ秋雨多し

十六日 水灯會 宇治黄檗山の僧宇治川の出て修行す

十六日 施火 送火たくりもい文△火文字火△妙法火

△鳥居火△舟形火○京洛外乃山々まで文字の形小たき木とて

てやくなり其間一丁二丁れも及ぶ鹿ヶ谷大文字此筆画甚は

市原山のいの字松ヶ崎の妙法の字西山の鳥井の形西加茂の

釣舟をけ外東西北處々乃山々よあまこあり甚見事

あり事ありこれを送る火又施火もいふあり

△送火 魂迎せし聖具と送る河邊小麻柯と燃と松

いふ京都の俗へ今日より大坂の十五日く其餘處よりて變まる

俳 送り火や宮家けり大文字 其角 夫ふふとて流せ難波川 三帷

京都 敵魔祭 今日と焰玉の縁日と京千本焰堂泰詣後

松崎題目踊 松ヶ崎妙泉寺堂の前を男

女うちまをり題目ふゆと付あて声れりくともあり

○山崎宝寺開帳○北山村石不動泰○紅木林念佛踊 昨今雨日

江○焰魔泰○増上寺山門開戸○雜司ヶ谷とまもり

大經木流 天王寺亀井ふあり坂 人の戒名法名と記し亀井

の水を手向すやふあり新綿 肉裏へ貢の綿を

いふ則真綿あり

◎夫木

為家

強にふるゑ士のくつ子に形強ん
たりのをれふ不似るらん

○右證哥と出とてく真綿く

後永祿の嘯より初て木綿の

舶来一故證哥と時代大相

違ふ事と見つた今昨諧の

季寄集は九月と出—三秋

小渡うとふふの藻塩草と

見らる誤らる七月十六日は

定らる事とてや○新綿と

して九月ふと事ハククハ

まだきまや尚九月の條はあ

と見るる一

◎衝突入

伊勢の山田ふあると

ふ秘藏とる物と見えたりや

思ふとたひ今日其家ふつと

入て見る事あり往昔の諸国

ふもありかど今絶より今

櫛伊勢山田ふ日の九代名号と

て圓光大師の御筆と出して

拜寺寺あり此日近辺乃

寺院も虫ぢいひとこれ突入

の餘風ありとて

◎排はとや大らりと呼ぶ波由

◎鷹鳥出

四月ふ初積より時

七月中旬新毛と生る時時と

出と今日時と出とと藻塩草は

○貞徳曰鷹鳥出揃ひる時夜

分益の聖霊會の著ととりて

時より出と故ふと鷹ももつ

◎定家

定家の所頼つるのそびたり定家

日次の所頼つるのそびたり定家

◎排炒火の片をやらじと定家

◎三尸虫法

庚申の日ご

◎妙藥

手足の爪を切て

より集め置て今日灰小燃て水お
てのむべー扱そのち一度庚申を
守まの三尸虫と伏し押へて天上
へ到らしめ守七度庚申と守ル
はほぬふ三尸虫をくろす
徐春甫が古今醫録に北帝
玄經と引てくハ
一々説くあり

六十日 赤壁月

今夕ノ月ヲ云○宋ノ
元豊四年獲子瞻

東坡居士今日赤壁ト云フ
遊ビシテ賦ヲ作りタル故事ヨリ起レリ
賦 古文真宝 前赤壁賦 東坡

壬戌之歳七月既望獲子と客
泛舟遊赤壁之下清風徐來水
波不興舉酒属客誦明月之詩
歌窈窕之章少焉月出於東山
之上徘徊於斗牛之間 下畧

○既望ハ十六日ノ一ノ獲子瞻此
日客人ト氏ニ舟ヲ赤壁ノフモト

ニ浮ヘテアソブニ清キ風ガソヨク
トフキテ水ノ波モタヌホドナ

レバ盃ヲトリテ客人ニサレ月イ
テ、明ラカナリ窈窕トシテタラ

ヤカナリトイフ詩ヲ
ウタフト云コノナリ

七十日 京 都 ○壬生寺六齋念佛あり
○上京小川本法寺虫拂

八十日 京 都 御靈御出 神輿今日御
出 抜丸へ御出

祭リハ八月十八日ハ日ノ間御旅外ハ
御鎮座あり委しハ八月ハ出

八十日 宗 祇 忌 俗姓ハ飯尾次郎右門
と称セリ人々を紀州の

武家ハりか世と違てて薙髪
京師ハ住し生涯を雲水ハ

連歌乃達人なり

十日 文學上人忌

行状委しく博物筮ふりごとす

十一日 諸地藏祭

今日地藏と祭る事は是又扶陽

の術ふして秋の金氣と扶めん為地藏と祭まうとを殊ふ石像と

祭る事ハ神道ふ石とまうらふ比諭してゆりた訳ある事なり

京 ○六地藏参詣。加茂山科、都御菩提薩の池、伏見、鳥羽、

掛村。已上六所 ○愛宕山千日詣。町々地藏祭とるに作り物とます

○大坂、うづね堀詣地藏祭分て賑に

○河内八尾地藏會式なり。近郷より群集す。廿三日廿四日大市あり

八尾のわろと市又野市ともいふ

あたご火 摂州池田伊丹ふりり 彼地の愛宕山ふい

ろくね燈籠提灯と影く燈と祭る人其火光近郷ふ映す

鷹山別 鷹の親子巢と立こく 鷹ふり 諺ふ曰鷹と

飼ふハ諏訪明神と始とん廿七日御射山祭より鷹も詣どる故

廿五日ハ巢を辞とせりつこの事かある論ありんハ

くハ補遺ハ知明と 他家とに別せも奪の服ハ芭蕉

北信濃 御射山祭 徳家作りの 御神事なり

信濃國諏訪明神此日薄多て 神殿とたぐる其外人家も祭りの程ハととれとふくありととさ

とみきとといふむハ勅使あ 是御持ありて鷹とつら

分 かりてふく穂屋のまのほふふ さま草やハ鷹さうらうん 定家

夫木尾花さう松やの号の一ゆふ ちり一里ある村のこさふ 盛文

俳 けの夜の神も為とろく日外許六

月令

此部ふい七月一ヶ月の
くく集えしりごと

攝待

△門茶の往來の人か茶
と施と乞ひする攝待

の事ハ仏祖統紀碧巖録 等小出て
唐にも古く有来するといて本

朝の俗稱といひあつて攝待の事
ハ常にいふも此月初より

廿四日頃より一擧小あり

非 抄約の条にもそととえしり

燈籠

△高燈籠 △さうと燈籠
△きりこ △船燈籠 △花

燈籠の影燈籠 西ハ △折り燈籠
△廻り燈籠 △軒の燈籠 △民俗佛

事とさす月なれハ佛小供する為
設る人多く十二三日頃より此月

中より守禁中の燈籠ハ十四日の
丸ふあると又大坂ハ墓處より

七月十二日より十五日
まで燈籠ととも守

○ 七月十五夜月あかりたる時 西行
いそ我今我の月ふれとそとて

みでの山路の人をてとらん

非 あらひはつくく懸る灯籠 移竹

紙裏とみそれる灯籠の並字ハ 冠里

踊

踊躍ハ遊戯の長より本
朝神代より有りのことあり

非 胡夕ふる子足さる踊ふ 豊後

狂 とやめ踊の庭の灯籠と
とやて持し小切籠をり 近吉

花火

炮術家の餘興ハ世
物より家々其藝ハ

狂 け火入さして小町ヲ 髻髻とや

非 け火入さして小町ヲ 髻髻とや

為生より花火せんかり 貞山

秋扇

△扇置 △扇とてり
△團置 △團とてり

連 凡とふ小納り秋の處ふ宗義

非 ちりちりて並てとちりちり一丸

① 夫木

定家

築ちてとよきすの風をさす

詩

秋扇詞

王昌齡

芙蓉不及美人粧 水殿風

來珠翠香 美人ノヨソホヒジヤガ

水ノ上ヘカケツクリニシタ御殿ニ井テ玉

却恨含情掩秋扇空懸明

月待君王 美人ガウラメシクニ

京師下加茂の東

都六齋念佛 干菜寺ハ豊大

閏の御時六齋念佛免許の状

給しけり。盆中近在の農民太鼓

鉦笛と合奏して六齋念佛として

洛中と歩行人和州ハ此處をふあり

相撲節會 是ハ三秋

△ 辻とまゝ 日土 漢名 角觥

とまゝといふ互ふ力と争ふと云

古訓ふとまゝといふ俗ハ孫ら

あふといふ心の言葉なり 角力

又ハ相撲をいふ文字ハかく

○ 禁中より二月三月の比諸国

小使とせうけされて力者とせう

多し事と部領使といふ扱相撲の

節會ハ天子も御覽ある事として

先十六七日の間小召仰といふこと

あり廿六日ハ内取として憤鼻の上

小狩衣袴と着て勝負し廿九日

とぬきてとてとぶる者ハうら

とすらん今諸社の祭ハ相撲と

取るといハ禁中の節會と八幡

春日をいふ給りしより始まる

② 年中行事奇合

女房

かこゝれてことり候の心も

能胡蝶舞ハ舞の也ハ角力 香西

時令

此部より七月一ヶ月乃時侯かろて死しらす

初秋 朔日より三四日と云ふ
初秋 いと和歌いひいふくよ
みて七月なるむもそのけーき
をもよそそ

千載

寂蓮

秋の暮る年もよふさあそや
萩なく風のおとろりいらん

全

初秋衣

為尹

小夜衣かきよしあくと吹はきり

もくた一葉の秋はく川う勢

金槐 海辺初秋 鎌倉右大臣

寄たちそ好くそ寄来いあじ

吟との淡乃うくの波か勢

詞もくあそ秋の色。秋と道ゆ

初。初て涼し。かや系。浅芽。露

の松風。今ぬを涼き。さふあま

あむとふ。じくう 風いあむ

の初風。松のあじ。初秋風。萩い初

始と知る萩いあそ初。始と浅
く松い風のあそあ。淋き。桐いあ

ら初る。桐の一葉 露い並初る。始
と先しる。初のあ 霧いあそ初る

扇いあそあそ並るあ 葎いあそ

じくうあけあそあ初いもさくじ

秋ある。薄い穂ふじそむる。

浅草原いあおむさそむる。

柳 柳桐い初始い一葉らうくとそ

よりあそ秋の処は故事あり

山 あじも同あそあそべりそ外やま

の京物とそせくもよそむる

俳 初秋はあうそあむすれ嵐雪

詩 初秋五字對句

同上

輕風換炎秋 桂月秋先冷

明月流素光 蘋风向晚清

詩 初秋七字對句 詩礎

地接邊関秋色早 動秋聲

西之ノ草 秋ノイモハヤシ 秋声ガルトスル

樹翻鳥鵲月明孤

片月孤

カサキカニテ月ノヒカリガサビシイ

ツキカサシクニ元

詩 初秋詞 五言律

元鎮

且暮已凄凉離人遠思忙

ヒヤ、カニナリタルユへ旅人ノ故郷ヲカイヤイカキテ
オモフコ、ロガセハシウナルナリ 夏衣臨

曉薄秋影入簷長

ハタウスニ覚ヘルニ夜カアケルハ 前事風隨扇
秋ノケレキカニキア入テクル

歸心燕在梁

ク古サトヘカハリタイ心ハウツバリニ 慇懃寄牛
アルツハメラミテモウラヤニシイ

女河漢正相望

テガワガミニツクサレテオモヒヤラル、

殘暑

夫木 秋風の吹ルつよめ去葛系

連 暑き日然るも秋意のほろ細巴

非 夕月流る汗や退ふま 嘯慰

可く比の付ぬお砂る暑きくま 風斯

詩 殘暑七字對句

詩礎

暑氣尚能凌白羽 秋光早

風聲不肯入清商 夜色閑

稻妻

送 去 饑 上 去 暑 の 去 上 送

意 入 故 饑 暑 と 云 說 文 出

光るハ秋のそと先にあけりこれハ

風雨よよはよあはれは季夏甚

き陽気秋收歛の時つらて

地中伏せんとするはより陰陽

相とあり合て光気とあけり

季秋已後ハ夏の陽気收り伏

とるによりいなるづまなり

晴て

ひるハ風雨なり

秋の始曇り

入。風々る。あまう初り。あまのためとをむれとふ

連 涼とてきけのあはけの風来哉

俳 盆あちの涼きハトキの類引宗典

詩 秋涼七字對句

詩礎

濯残暑氣朝来雨 三伏冬

カシヨコヲアライナカスハアザノ

サシクノチ

助我秋声夜半風 一凉新

ワカ秋ノコノロヲ作レ侍ノ奥ヲ

イキヨクニ

初嵐 △初慕風。初秋の未よ

△中秋の中比まて乃

嵐とつゝ〇嵐と計ハ連能ハハ

雜より△初嵐とて秋は定む

時節故吹風もむごやうり

秋より陰ハ次能もる故吹風

も秋冬ハありし故ハ初の字

を添て秋の季とす。昔嵐ハ夏

夫木 慈圓

秋風ハ萩の上葉もあはれて

あはしかうつるをさるべき

詞 嵐ふる。秋もあふ。秋分。い

づく。吹。あまき。吹ま。おな

びく。つゝさねまる。やま。

連 ねやとねまると吹守初嵐宗碩

あやうなる葉あひくやう嵐左秋

俳 絲入る葉ら守嵐の秋きハ保久

冷 涼とつゝよりの重く

寒とつゝよりのあう

哥 雪玉集 實隆

か 衣帯分のなきの胡きむよ

秋冷しき花とてそらう

俳 ときまは河の鼓のたまは 芭蕉

秋色 州木山川とも秋色を

あうたむらとつ

分 花ふらう川てもはる秋のちと

こけてときらつる白の花 顕憲

二百十日 立春より二百十日の

をいへり今日の風

と恐るるの二百十日の早稲の花
さうり二百廿日の中稲二百廿日ハ
晚稲の花盛りへ是より後の
花らう実ふるるゆへ風吹ても
稲はさうりず稲の花ハ中ハ水
のどけ白さるのあり是米又
なうく風ふけハ此水と吹らう
さふより米出来さるる雨
ふれハ此水を花よてはむいよ
と風ふれてもさほど害をさ
さす雨なるの大風を恐るく
ハ東北より吹を大坂を上げと
ふハ此風吹はのまばいえて志け
にさう西より大風を吹りさ
よより是とさうハ○東南の風と
いなこ或いせちちと云あて
るるれども是もさうつのはい
大志けふるるとて東より吹
風ハ雨はさうささハ西より大
をよて吹りさ雨ふるはさふ

この事さう大形ハ雨よさう
て妙ささうさ○西北より吹と
あるせとつて日和より西南と
沖氣とふ曇りてさうとれ
ども日和つてさうのくささとも
りさうり出せハ此日和ハ長さも
のまも西より晴てさうかおれ
ハ沖より雲とつてさうのわして雨
ふるさうハ此風吹はけハ日和も
曇りも雨もさう長くつて
りのく○申酉の方より吹とま
せとさう日和つてさう○東よ
り吹とさう西より吹風ハさう
とらハ風あり此風ハ地ハさう
つあて其所より風次第小と
さうつてさう大風よさう稲と
損さる事甚し雲ありて北
風ハ雨を洗ささうさう秋
北とさう秋ハ金さう北ハ
水ハ金生水の理とて雨を生ど

さく志うれとも夜晴
て北風の日和より

草木

七月の草木と集むる内の
三月にもしもつるものあり

楓 △青楓。本名を雞冠木といふ
和名をかへせといふ事ハ野の

手に似たる葉なるゆへ各づ
らるり種類はなし

異名丹楓。紅楓。霜楓。玳錦。
和國乃楓。唐土の楓。

大小せらち異なり葉ハ三角あ
らして兩様ありし出

唐



和國京都
高雄楓圖



○かへせ。ひさだ。そとそ。ま
ゆみ。これ類紅葉とるとス

ハ九月なり入りく九月草
木のさく後ふしす

○万葉 秋高ふりつる楓なるあふ
いもと。つぐあふ日なり

俳 秋田川あけ多きなり
まことふゆはあはれはあ

風ふらぬさぬあはれはあ
あ楓あはれさぬあはれはあ

狂 まことまといぬあはれはあ
あえてあはれあはれはあ

秋 キサケの畧へ又雷電桐
ともいふ又かきさきさき

ともいふ此木雷除とる故
○さきけのてく長一尺許の葉

枝の間ハ垂る皮鱗のてく
異名 木玉。實名 榎。梓。椅

榎。さきく少しつてかつれ種
類多し。こひさだ。さういさ

赤芽栢。あづき。河原ひさだ
等諸家の説多し入りくハ

禰遺よ出さへ
○夫木 ういさの夜のまひハ

非 取うそふよとゆり榎馬尉

柞 栢の属なり実ハ淡くし
て食ふべし暮秋ハ

紅葉とれども色々すし哥
ふも色々たるうとよみなり

○万葉 山ノ石界小のちとを原
とつてや君のふらゆらん 宇合

連 ちらぬうろ朽葉をさるる柞ハ紹巴
俳 柞葉ハ秋の男のそふちり 提河

檀 文字ナリナキ寸檀木ハ
唐土より沈香或ハ白

檀の類とて日本ハあることなり
今にてまゆとつふりのみき

として枝ハ矢の羽のごとく物あり
木の種類も其羽をたをまる

陸奥より紙ハ作る物此木ニ
○表のびと表匠もよこ色ふりし

これとあじふあつせもよま 顯輔

檀 木名 黄檀。天子の御袍
これを以て染る故又黄檀

澁とつふ三月ハ白花と開き秋
とや紅葉とる漆の類なり

木 槿 日及。舜草。
花ハ朝ハ咲

て夕ハ墮る故ハ槿花一日栄
とつて今 俳諧者流槿と

あさガほと混ぜりむり
まむくげとつてガヤとつて

一とるなり次乃万葉集の
哥にて知るべし

○万葉 釣魚ハあさあむいて咲く
夕ハあむいてさきたまうたれ

○是むくげの歌なり古名
朝顔なる事あるべし

俳 小日向の筒ハけさる木槿ハ芳室
ふとみをわくそむひむくけハ杉風

朝 朝 近世数種の珍花と出
一名 假君子。朝花ハとき

辰の時ハあむむ蔓草なり

①浦風ふ浪や舟りうん波水
ふいぬ石の物色乃こも 頭季

詞花の物色。舟の物色。ふいぬ
の巨鯨。仇るふこれ。一時。夕
かすまきこあ。去の先を。舟
むとふかり。さかりを。まき。

②連ひふ日かきお虫の流し宗砌
③非葬つてふおれとりの水千代
葬のせのく嘆て浮世ふ常故
④狂物虫のあふたぐー人間も
あやと命のともおおさ 僧一道

秋海棠



異名 爛腸
草。煎服

花。り、海棠、いふ名ハ海外より
来る故名づく

玄及 會及。五味子。莖を
美男ぐうと云堂上方

髪と結ひりく地下及び民間

元文寛保の頃まで此製
残る賢附油さくふりて

より玄及と用る人多し只雲乃
上のもろり花ハ三月実ハ七月入

桔梗 △さくらびうのいりへま
蛾のひらさとりう

桔梗の花咲きたるをさき千代
桔梗の色老子のほのむかひ寒竹

狂物くしてこれ桔梗の染物や
色あさめとつむ見えたり葉門

澤桔梗 葉ハ山丹に似て少
短く又桔梗のおと

く大ふく花碧なり根白く沢
中ハ生し長く生るく又浮

⑤非 沢桔梗花の色を染るは茶膏

蘭 京師の俗ニランと称を
野ハあり物ありとては

の葉よ似て切又う薄紫乃
花とひくく香ハ葉ハあり蘭

三種の異あり漢土の古蘭といふもの今の茶蘭なり和の藤袴と称する物の本朝の昔より蘭といふ物入和漢近世蘭と称する物の建蘭なり次ふしうす

古今

敏行

何人うらまてめより中後ころ方来る物ころにせよと白ひす

夫木

匡房

かまよ世の糸紫の婦とくまふ代の秋まて白へととるふ

俳 蟬丸うけを切す葉支波

狂 空をひくとままはてくとやらん

白ひもふととるふ白ひ貞徳

建蘭

数十品あり其佳うるの價大か貴し兼長

く麥門冬小似て一二尺花の莖と抽で数花開く蜂小似たり

俳 葉はちや葉切削て是賦る巴靜

狂 若ととるを茶をふオ丸

狂 坊小似く鹿てまきれたれい

廁のそふ白ふるらん喜文

女郎花



小翫びり

ありこの根醬のムさうらる香あり花ハ人のよく知る如うり哥

いよむいそを女小たとへて戀哥小尤多し俗敗醬と混せり

偶よく似たりと以て誤る敗醬の弄花家羽衣と云花へ

古今

僧正遍照

名ふ多そむむらりうそ女郎花これあふた人よかりるる

○此くこの遍照り奈良へまうまらるとたれとこふうそまきまへととるくよ多そ

千栽 女郎花遺風 雅兼

そまへりなむととれは秋風の

吹来り末もるふくきさる

〔連〕とほりほいとひらるる人とは 紹巴

〔俳〕いふくくはあややあやな芭蕉

〔修〕い志とりては 虫や女を心后里

茶の花 とほりほい少し似 とう花白一是と男

べーとつらこと 覚東は 尤万葉

小男べーとつらこと 哥わら

とほりほいとつらこと 哥とほりほ

とほりほいとつらこと 又茶の字義もさつら

ず按とつら小女郎花小白と花

あまのつらとつらこと べーとつら

つらやあまのつら先俗説もさつら

茶の花よあまのつら

〔俳〕つらやつらつらや男べー百外

男べーとつらつらつらつら其十

〔狂〕男べーとつらつらつらつらつら

いふら人の原あつらつらつら

〔俳〕仙翁花 一名 紅梅草 花の形がんび似

とつらつらつらつらつらつら

〔俳〕仙翁花 花の形がんび似

観音草 用藥須知 花の形がんび似

花いうす 穂をさるす 花の形がんび似

〔俳〕花の形がんび似

翁草 初春苗と 生一葉麦

門冬小似て甚白く白髪の如

故小号く花秋へ 三々國會出

〔俳〕散木集 俊頼

乃の辺の人よあまのつら

〔俳〕松子の枕もつら

弟切草 漢名 劉奇奴草 元秋より出す又

師草の青葉の花小黄

稜の葉と心とび中不小る子

あり○青菜又菜師草と名づくる此草金瘡のハホふる故るり劉奇奴ふくんと充れども茶能ハ一ふと花葉異なり

哥 鷹百首

定家

秋の神ふまき松のころもま茶
短ふてふちやうおるらん

非 さいさよあまらねのまはま風

妙菜 疝氣よハ陰干にしてせん
用也○血も切き守よハ此葉と

陰干にして粉あり油よく移り付る
○此葉とちをバ汁出るらん一

切の金瘡又ハ腫りふつて
てとるなりと妙なり

益母草

一名 菘蔚。莖胡麻に似て葉ハ麻に

似たり節々小花で開く実あり婦人の病に功あり故ハ益

母といふ目と明らふ一精を益と故ハ多と下きの名あり

萩

○波木△系萩△白萩△小萩
異名 胡枝花。天竺花 花史出

和名

△古枝州 葎五△鹿鳴州 和名。初見州 葎五
庭見州 葎五 月見州 葎五 野守州 同上

冬莖かんじして春葉を生じると
木萩といふ。冬葉莖ともふれて春

新しき苗を生じると小萩と云
△系萩ハ花紅なり△白萩ハ赤ろき

花あるべし興州宮城野小萩多
生ふる山わく其内よハ白花あり又

白紫咲くけなともありとぞ其外詞
の所よ△印あるハ季よ用也

哥 續千載 我紐ハ萩のまはめ
とよあかたを落さかろしん 俊成

玉葉乙女よりかろし萩のたのふ
まどろくをふる萩のまはめ 為家

藻塩 せなまらうとせ中一死を野と料
ありし萩秘をゆりつるらん

截玉 天城のまはめさある古枝ま
ろし萩も死ハ咲たり 西行

ハ野菊の黄もろふごとく
異名 滴露金。野油花

野菊 鋸稗蒿又野粉團と
つよよ之菜に似て莖か

うー救荒本草に出又春ハトあると
つよよの秋花と云野菊と云

やいと花 葉女蔓に似て花を
筒ざれたなりやらし

かろるはふくさあり小花いろ
白く内とこー紅く小児の

これの莖つきのかろる上あり
て身にあつく灸のものとする

いよく似たりゆへ名づく
非 これもスエ母の恩あるやとた立圃

曼珠沙花 **和名** 天蓋花。燈
籠花。漢名 石蒜

異名 烏蒜。老鴉蒜。水麻。
蒜頭州。漣々酸。一枝箭。葉

ハ狐のくもさうけしー花ハ莖と
ぬきんで五六朶つらなるりぞ

わー糸とむとふがあとく
非 もろいも結ぶの莖死に心共十

常山花 葉ハ梓樹に似て
いろく甚くさー

六月花を開く七月ハ此虫
とるなり常山く苗乃名

蜀漆ハ根の名あり
非 同それハ山の花もろる花

頰桐 〇ひまり。葉大さき五
六寸ありて皺あり

菑麻子 **和名** ぬり。おま。かろる
〇かろる

止桺 洗桺所々あり。洗取
法又洗紙の仕中うへ

く日本歳時記ハ出せり
非 洗とうや仏名の票りトたん岩翁

茗荷花 七八月根のかろる
子と生と即花あり

鬱金花 **異名** 王金。葉ハ芭
蕉に似たり花白

質紅く深こほ色こほなる此根より

花はなのふきのさうふ似て甚大なり
非 なまぬいも おろせり ぬき さか 鬼 実
うらんまけははの愧こらうい海言水

薏苡 いんぎ 仁にの穀このぶくく 粥
とほくちるさて念珠ねんじゆとさす
いりこの名あり実ふより

て季きとせり
非 なまぬい も おろせり ぬき さか 鬼 実
今糸いまより先まへ一ひと さ と せ た 粥 玉 瑞

蒲萄 ぶどう **異名** 蒲桃 ぶたう 草龍珠 そうりゆうじゆ
北国きたくにふとくは蔓つるふ

て棚たなと延のびふ実みと以て季きとす
二種ふたしゆあり一種ひとしゆは多おほびびふふと云

紫葛 むらさきくわ 多おほびびふふの山やま蒲萄ぶどうと
名なるり 紫 葛 の 樹 の 名 一 種 の 別 名 藟 藟 と い ふ 。

び色いろハ此このこのこ以て深こほく物
るりとぞ但ただし蒲萄ぶどうハ実み乃

エいとハ 醜 く ら ぶ た の
実みの色いろハはききくくり

非 なまぬい の 樹 の あ け の の ぬ き の 野 坡
道の実みハ愛あいへしと蒲萄ぶどうハ地高

詩 全七字對句 **詩** 礎

アンキタツテシニヤウセイセニヤルホニ
雨来枝上清泉沾 ニユクハオモ
珠たま顆か重かさ

ツユオモクテシヤウシニギョクタル
露重つゆおも稍すこ頭かぶ紫むら玉たま垂た スイニヤウシキス
水晶すいせい明みやう

アツカフツクハエダノウウヘニキヨキ
雨来枝上清泉沾 タニガオモク
珠たま顆か重かさ

イヅミガウルホニ ヒガルヤウナ
露重つゆおも稍すこ頭かぶ紫むら玉たま垂た ウニキフツク
水晶すいせい明みやう

妙術 蒲萄ぶどうと壘うしの根ね乃のかかりりに
裁きて春はるののり其その木きハ穴あなと一ひと

あけぶざうれ枝えだとささららふふ二ふた三さん
年としと経へて枝えだふふり長ながくくりりて

東あづまの穴あな一ひとたたいいハ満みちちりりととららふふの

根ねと切きりりととららふふ東あづまの木きの接つぎ木きと

かろろりかろろりよく生長せいじやうして実みと多おほく

むとむい肉厚にくあつく東あづまれじ味美あじい是こゝ秘術ひじゆ

桃子 たうし **異名** 仙菓 せんか 蟠実 ばんじつ 三偷 さんちゆう
洛陽路 らくやうろ 種類 しゆい 碧桃 へきたう 白桃 はくたう

桃たう子し 洛陽路 種類 碧桃 白桃

○早挑五月の毛桃山中の冬桃十月は

○霜挑上これ西王母の桃の類を

日本にハナシ 此外種類を

多ク又異品ありのあり大なる

一抱に及ぶりのあり

○非桃の實の味も又味も違二

類つる桃の若くやた若く又一

狂挑尻ふりて受くる長くは

三ふみのふらふらとん貞柳

詩 桃子五字對句

クハノヨシホテカケラニヒト
ヲボセシ子ニノモ

顆々粧霞媚 王母千年実

ヒトツクカスニヨソホフ
タビニノルモニヤ

團々帶露肥 素人幾代孫

タルクトレテツユラホ
シノ代ノ人フテ代ノ

テコエタリ
ゴノスニナ井ルノモニヤ

○果實多品惟桃可佳天々其

色灼々其華 詩經ノ語ニテ花ノ見

クタモノ多シト云ドモ
ナリセトスニヤ

○為仙益壽ト

ナリトハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ壽ヲ

ニストハ東方朔ガモ、ヲヌスニタル故事入

○或制而祛邪 桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云

○或美后妃之德 女ノトクヲハフヲ桃ニ比シ

○或報瓊瑤之華 玉ノカハリニ桃ヲヤラ

皆詩經ノ故事ナリ

桃子

三偷

漢武帝ノ時東郡

ヨリ短人ヲ献ス帝

東方朔ヲ呼ニテ見セシム短人方朔

ヲ見テ曰王母ガ桃ヲウエテニ千

歲ニ一度實ヲムスブ此人其桃ヲ

三度偷メリト云ヘリ 漢武故事出

青花

山海經ニ曰磅礴山ハ扶

来ヲ去ル一五万里日ノ及

ハサル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千

圓其花青黒シ万歳ニ一度ニノル

木瓜實 異名 鐵脚梨。樹

蜀。是はさくくハ

リンの種類をて實も大体を似

たり又多くあるのの櫃子を

草木瓜より林檎の
ぶくしりきも味酸

槐花 六月末より七月ふ至り
黄花と開くより赤む

の木は種類多くて葉の夜の眠る
唐土かひいゆへ槐と植て其下に
て訟を聴くと云日本にても
其遺風と云こい大臣の別名
と槐門といふ大納言を亜槐
と呼ぶなり

詩 槐花五字對句

畫影篋青禁 縣六蟠根出

日中ノ葉ノサゲハキニ フルキアモタニハワタカミジ
中ヲコメ タ根カイヅル

秋香拂紫宸 城荒細葉殘

ニシカウハララ レニシラ シロコヒテサイヨウノニル
アキノハナノ白ヒハレニシ アレタルシロアトニハコミカナ
テニラハテラフ ハガノコツテアル

槐之 植三槐 事文類聚ニ曰王
故事 晋公拈手ツカラニ

槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラ
ス三公トナルモノアラントイヘリ

果シテ然リ天下三槐ノ王氏
トハイヘリ

蓮子飛 蓮の子と荷と
房の中ふあり此こ

る自ら飛んで水中か入
能 まけ実とあひるも後子の 越州

在 扱ホもかろくめたてま臺と
ころして人もあふり多り 宗惠

詩 蓮子詞 東坡

緑玉蜂房白玉蟬折来滯

露復含烟 三トリイロノ玉ガ蜂
ノスノ中ニアリテ折テ

醉嚼新蓮一百圓 味ハリノ玉ノ盆ノ洞
味ノ汁ノソコニ

アルガコトク見ユルヲ醉
テ百ホドモカエタリト

刀豆 一名 挾斂豆。葛豆。

唐ハ赤一日本ハ白一

蔓草より

非 拍さしてほむるこ豆の垣根 東因

夕顔實

花白

夕顔のこま入むはさそを社

瓢箪日月をぬねと志の方故然

青瓢箪

右ふ地より

狂病む類と志瓢箪と云ふは

西瓜

五代の時より始まり日本へ慶

種と携へ来りて初めてるが

非出女の口紅にむる西瓜は支考

狂美赤さうそといふてま向な

妙菜 衣服小女ほどのやれ

何こ

似て美るるす皮のうへは

非あそこ瓜又非燕人の似る基中

味酸 此仁と菜物

非針とんは穿ふは

狂らひきて実は厚たれは

山崎茶屋のふか

るゆりこ

るゆりこ

詩 東五字雜句

甜出諸錫上

今作中州瑞

アキハモロクノアタラ

ムフデハ中ゴクノヨロシキ

香居百果前

元從外國傳

カウスガリヒタタテニ

モトエニゴクヨリツタヘ

詩 東詞 五言絶句

北園有二樹 布葉垂重陰

外雖多棘刺 内實有赤心

見ハニかくシクカラクハアレトモ内ニハアカキ

粟穂 種類 穂。粟。穂。又粟

哥万葉多又振林の社一さうせい

西粟 生願 神代卷保食神のひ

少彦名神

神代卷少彦名神の

大己貴命共小国造りましく

終小淡路島小至り粟莖小縁

稲葉の雲 稲の葉はよく

稲花 異名 八富州の花

夫木 後久我内大臣

非 夫木 後久我内大臣

門田のよみの波乃花より

非 夫木 後久我内大臣

非 夫木 後久我内大臣

鷹打 山中かて鷹と捕を

鷹打と云そのたを

鷹と捕をていまご

人さしざりと云則

鳥屋勝 四月より羽毛と替

鳥屋とも片鳩とも云二年

と両鳥屋とも兩鶺鴒とも云三年

毛全くとそなりつ勢よりを

鳩吹 手と口ふあて鳩のこを

鳥屋勝とつり三才四金出

非 鳩とさるちふらるる屋下

年うき鳩と姑の物人

秋蛙 秋も鳴く蛙之

狂 技あるか守不亭かまけゆら

秋蠅 凡るされたの窓と

秋蚊 溢蚊と残る蚊

秋螢 鈴鹿箱根らどの

等くりりあるす熱と秋への

蚊蠅の類夏の部と異名

秋風とさるる厚みつるを業平

非 身退や螢も秋の天のた入重

秋蟬 漢土より入るる蟬を秋の蟬とす

○拾遺 神宮の蟬の音を秋の蟬とす

秋の和風を秋の蟬とす

○非 月夜を秋の蟬の音とす

秋の月夜を秋の蟬の音とす

○在 秋の蟬の音を秋の蟬とす

秋の蟬の音を秋の蟬とす

詩 秋蟬五字對句

客老愁城下 小池兼鶴淨

蟬寒怨路傍 古木帶蟬秋

萬頃白波迷白鷺 落日中

一林黃葉送秋蟬 不知秋

詩 今七字對句

詩 礎

萬頃白波迷白鷺 落日中

一林黃葉送秋蟬 不知秋

蟬聲驛路秋山裏 噪暮蟬

草色河橋落照中 漢宮秋

青紫長一寸 此世の蟬

夏鳴く守俗よりつじよと鳴

とつじよと鳴くも初秋の蟬

非 秋の蟬の音を秋の蟬とす

茅蜩 寒蟬の音を秋の蟬とす

青緑より山中の蟬の音

尚より其の音を秋の蟬とす

○古歌の夏小詠より連俳の秋とす

連 日々じおぢるうら 匠秋の象肖相

非 日々にやむよひうら 象肖相 秋胡蝶 色虫或ハ芋虫など

哥 源氏 初まのく 於嫁とさや小葉 秋まのひいひうらとくこらうらん

非 嫁とや今けらうら 菜のさま 菜園の花のさや秋のてふ連三

狂 ことともあはれさもぞ秋の菜畑 あやうく嫁のまのひくをす 椿賀

田畑虫送 田蝗害とまさん

送る又ハ 松明と照らして 田中と 呼りもあひひく 陰陽寮ハ

余どと 船岡山はまのひくしあ

蜻蛉 和名ハアキツバハ 胡藜。

赤卒△赤えんぢう△あひやんま

色と異ふするのこらうらやんまハ

古言ハエムハとつう通音あり

かげろふハ元陽火の名なりこの

ひノ水辺の日かけハ飛ぶがゆへ

陽炎の名といかりうらとつう

秋つむとつうハ惣名を古

名かり次々故事あり

○胡藜俗ハムキトニボウ大うて

其紺なるもの紺 と名づく俗

カ子ツケトニボとむら

○古哥ハあぢろふとよまら二ツ

あり一ツハ春乃新ゆらの事一ツ

まこれむの事あり

○後 秋はねのこまのこま

非 かのり尾と報ははこや一とひ

川花いこむらやんまのこま 廊葉

詩

全七字對句

詩礎

風定織枝堪綴足

相逐戲

雨来密葉好藏身

聞高飛

蜻蛉

日本紀神武紀州

故事

一年夏四月巡幸

醫帖

日本紀神武紀州

あめひ脇上の 嘯間丘小登と國

の状と望ませめひてのたまこく

あまめえやよた國と獲より内

ゆへのまゝた國とスとも 猶蜻蛉の

醫帖せりがぶととありこれより

日本と始めて秋津國とスリ

○とよ老い此いしは尻より付て

さもし飛ぶがごと

虫 虫の音 虫の聲 虫の題

次記す分はつらきもよあり

哥 夫木 花山院

家集 月前聞虫 清輔

あもあや小もあをを月をふ

さそをううの虫れさる

新後撰 野虫 為氏

雨状のつとを招きてさうくと

るるまへの人あはひあつとん

龜山 庵虫 為世

あまかたのまのらなれ夕つふ

惟ふまへんら松むのさく

詞 春う。春ふしあ。あ。さ。さ。

あさう草のさむ。あ。あ。ま。

の杯あけを蓬のさむ。あ。あ。ま。

若 残葉の あさう草。あ。あ。ま。

あさう草の あさう草。あ。あ。ま。

あさう草の あさう草。あ。あ。ま。

あさう草の あさう草。あ。あ。ま。

不似しる故に名く。松虫。鈴虫。響虫の三種人々其音と尤賞す

哥 山家集 家隆

おのゝろ人なれたのゆゑに
あはれてとらる響ひしや那

月鈴虫 金鈴虫とも云又月
鈴虫とも云色黒く少

黄く音のりくくする

哥 未きととらるしるをさか

神禾のまけとらるしるの声 乾光

詞 ちりてけりしるの

連 けりしるの

松虫 蛸とも云其音ハ
チンチンと鳴く

散木 俊頼

夕されのせりしる物をさかすん

松虫ちりてあはれりしる

河 ちりてあはれりしる。文のま

ても。松虫のまのりしるちりて

△人まら虫。けりしるをさかすん

連 松虫も風ふりしるの声 宗祖

俳 松虫の響ととらるのけりしる友静

○ ちりて松虫の異名とて一虫

ちりてしる又松虫の声 清亮

しるしる、しるしる如く松の音

似て松虫しるしるしるの謡曲

野の宮の関ふ誰まら虫の音

んくちりて風范ちりしるしる

へ松虫のまのりしるしるしる又

狂 ちりしるのちりしるのまら

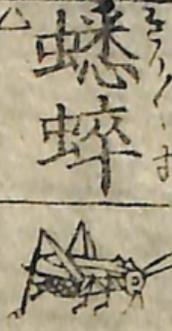
右の外説多し上は圖とる所

畿内を人家籠の内を養ふ

丸之尚國々水土のりて大同小異有

一名 莎雞。とや丸

○ちりて虫のちりて



其音キリクスと鳴く二声三声

舌つとらるしるしる

○順和名鈔曰蟋蟀一名菘。木

里木里須とらるしる加茂真淵の説

二ハ蟋蟀ハ万葉ノ

哥 秋風之寒吹奈倍吾屋前
之浅茅之本蟋蟀鳴毛

トヨシトヨルホヨレハ和名抄ハ蟋

蟀トヨリクサトヨシトヨルハ誤リ

にてトヨルゴトヨシトヨルハ

夫木 惠慶

之庭草ハリシトヨリクサトヨシ

ナリクサトヨリクサトヨシ

雪玉 早蛩鳴復歌 為氏

之のくれハ和秋風のヨリクサト

トヨシトヨルホヨレハ

詞 山蔭。秋風ノ寒。枕ノり。ク

サノはく。トヨシトヨルハ

連 さらくす縁ハハハハハハハハハ

俳 常灯ヤ蛩ハハハハハハハハハ

促織 一名 斯虫。翅織

俗ハトヨシトヨルハ

蟋蟀トヨリクサトヨシトヨルハ

冬蝻トヨリクサトヨシトヨルハ

俯仰トヨリクサトヨシトヨルハ

金葉トヨリクサトヨシトヨルハ

詞 声のやと織。トヨシトヨルハ

多トヨリクサトヨシトヨルハ

其のたて其のぬき。織。トヨシトヨルハ

蛩 一名 蜻蛉。形蝗ハ似

生ト秋ハトヨリクサトヨシトヨルハ

蜻蛉。古保呂木トヨリクサトヨルハ

千梅の説ハトヨリクサトヨシトヨルハ

俳 ハトヨリクサトヨシトヨルハ

電馬 状ハ促織ハ似テ稍小ハ

脚長ク好んで電の傍ハ

鳴故ハ電馬ト云漢名電雞ノ好

事ノ人是トキリクサトヨシトヨルハ

俳 打ハハハハハハハハハハハハハ

桶ノ接ハハハハハハハハハハハハハ

馬

馬

○さうくきと。とこさう。さふろさの三虫同類。やて和漢とも弁

別議。うらふん詩。經の五月斯

冬。蠖動。股六月。沙雞振羽。七月在

野。八月在宇。九月在戸。十月蟋蟀入我牀下。とあり。朱子注。よ

三虫一物なり。時々變化して其名と異ふことあり。

稲虫 八月稲の所小委一

をある才季の多分七月と

阜蝻 此虫性不嫉。雄虫數虫。つらむ一母百子。故小五百子云

又此虫一夏小子と百生する故小五百子云

俳門の著く進出といふは虫也

推虫 俳 推虫乃をあり一

柴やは家小舟 友静

蓑虫鳴 漢名 蓑衣虫。結

草虫。壁債虫。木

螺。○そのむいーといふはにてと

季とむいんものむいーとと

ハハ秋く清少納言の詞。風

の音聞知りて八月とありに

まば父とくといふるげ小

つらむありありといふ

○おぢうえねのかもあはして

秋風よのむみのむいーの音 寂蓮

詞 ともる木の葉。秋風よのむい。

俳 ちの虫はさるとさふ来とまの房

馬追虫 田家やそへ人家近く

鳴の声牛馬と追ふがほし

○叩頭又々

稲舂 此虫もいふ又

とてくともいふり 古名 子羊子

形 緑色うを頭尖り社人の鳥

帽子着たる小似れ俗小祿宜

と伸くと稲とほぐが如く動く

藻鳴虫 藻性虫の音。俳

ふれくと多くよ

七月の内に小虫あまのこをいれども夕ひよ
 夜うらまをいれく此月うら
 野辺に出て菘菜露
 うはあひ縮の穂の出で青と
 て風にそよけき遠く
 のぞめい平々として面白

破		軍		方		向	
夜九ツ	戌の方	夜八ツ	亥の方	夜七ツ	子の方	朝六ツ	丑の方
辰の方	巳の方	朝五ツ	寅の方	昼四ツ	卯の方	昼九ツ	辰の方
未の方	申の方	夜五ツ	巳の方	昼七ツ	午の方	暮六ツ	未の方
		夜四ツ	酉の方				

時刻 未日申日未刻申刻事と
 未日申日未刻申刻事と

方角 家普請他行東北の
 方角 家普請他行東北の
 方角 家普請他行東北の

天氣占候 卯の日三ツあれ
 天氣占候 卯の日三ツあれ
 天氣占候 卯の日三ツあれ

野菜もでもいれか
 野菜もでもいれか
 野菜もでもいれか

衣服式 帷子を着るる當月
 衣服式 帷子を着るる當月
 衣服式 帷子を着るる當月

菘重 菘の葉をいれ
 菘重 菘の葉をいれ
 菘重 菘の葉をいれ

裏うすをいれあ
 裏うすをいれあ
 裏うすをいれあ

女衣服 白帷子を着るる式
 女衣服 白帷子を着るる式
 女衣服 白帷子を着るる式

養生 夜漸くひやうる
 養生 夜漸くひやうる
 養生 夜漸くひやうる

風小感トやと或ハ感冒傷
 風小感トやと或ハ感冒傷
 風小感トやと或ハ感冒傷

慎んでこれとさくべ
 慎んでこれとさくべ
 慎んでこれとさくべ

此北をすびの根とさくべ
 此北をすびの根とさくべ
 此北をすびの根とさくべ

刻とせんと漱疥と洗ふをよ
 刻とせんと漱疥と洗ふをよ
 刻とせんと漱疥と洗ふをよ

飲食

七月一ヶ月の食物の類あるを出す

焼米

籾米の青稻を炊り、確を搗き簸きして

籾と去る色ば米ひくたくも、味其美なり。糲米もその味

劣なり。靖蛉日記ふやいこめあり

① 焼米やきだててその種の味雨更

切麥

△ゆる煮△あつむき○ひやむき
夏もむきあり六月ふ出せ

○ひや麦いぬついつらるる物うまう
詳なりす今つひはさへ

ハ細く温飽とい申 喰ふと

いつく又ゆる麦の冷るるといふ

ぶと〜 何れ麦の煮てあると

といふ 職人哥合ふ

② とうとうのころのうらめあつ麦の

ち〜あけのせとに月とるるもの

○ち〜あけの瀬戸ハ備前国なり

③ 切麦やあじはるる膳の上蓮二

七月飲食 並 料理献立

禁 雁肉 思邈云此月食ハハ神物を破る 又礼記ハ此月食ハハ

人ハ益あり ○蓴菜 李延云七月 歳多く著く此と食ハハ雀糞やむ

好 胡麻と食ふハハすく内を 物 闍を守あり 長生論ハ申す

汁

塩じゆり ほと鴨 湯いぢゆり ちりど

あちち ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

清汁

ちんせう ちんせう ちんせう

れこせ ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

膾

せいご ちんせう ちんせう ちんせう ちんせう

こいし 若さけ
しんがめ

らま ころも
あしけ けいけ

能 若さけ

差味 たこ細切
あしけ

生かす けいけ

たつ けいけ

まの 朝海 けいけ

煮の

生かす けいけ

あか けいけ

まの けいけ

あか けいけ

小 けいけ

あか けいけ

和會物

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

吸物

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

精進

汁 本 けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

贈

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

あか けいけ

清汁

あか けいけ

差味

白うり
いつとけ
ゆを

大いんごいさ
志ぬいけ
うりほ

菊の葉を煮
せりねら
ゆりね

あぢふ。日ご光
むす
かじこもとと

きとびかん
まじりびん
しいまけ

いとこんあく
うにぞうけん
ちりせりほ

煮物

あぢふ
まのけ
葉付あぢ

土瓶ふ
うりほ
あぢふ

かじ丸丸むき
いと切替本
うすんどすりせう

新山いも。き豆
根こけ
ふごあんけ

根いも
ゆりね
とさい

志免
とせふ
あぢふ

せんま
あぢふ
ひらたけ

和會物

きんかん。かこ豆
本うりけ
せりこもあく

むいさ
ごぬこも
あぢふ

伊新あき
ゆりね
ごぬこも

きんかん
あぢふ
せりこも

あぢふ
たぢあ
たぢあ

ひとらちるすび
あぢふ。うりみ
ごぬあ

あぢふ
たぢあ
あぢふ

